

里の思ひ出

紺屋淳之介

オンボロの三等車を降りるとそこは故郷の無人駅。もうすぐ篠田ん家の山に日が沈む。秋も終わりを迎えようとしているのか、この山中の村には寒い北風が吹いていた。

駅舎を出ると田んぼの広がる景色だけだ。ゆっくりと周りを見回しても、相変わらずここには人の気配がない。数年前に買った薄汚れた鞆を持ち直して、私は東へと足を進める。

この畦道を歩くのももう十年ぶりのことだ。中学校を出たその日に何も持たず街へ向かった私が今、記者としてここへやってきたのは運命か、それとも偶然なのか。

両親に迷惑を掛け続けたあの頃の漬垂れ小僧はもうここにはいない。街では一応の仕事に就き、供に暮らす女性もいる。故郷に錦を飾る、そんな気持ちがどこかにあった。

街で得た仕事は新聞記者である。確かにうちのような貧乏新聞社では、脚は強いが学歴のない若造は「外廻り」をするのが常であり、いつ何処へ行かされるかは自分には選べない、きつい仕事だと普段はつくづく思っている。しかし、自分の育った村へ帰るとなると歩みは自然に軽くなる。

どこか浮かれた気持ちと夕暮れの寂しさとが相俟って、私は二回クシャミをした。

「友次か」

父は遠くを見て呟くように言った。無感情なその言い回しは変わっていないものの、全くの白髪になったその姿に年月の重みを感じる。

炉端でひとり、久しぶりの母の飯を食う。ラジオもない居間にすきま風が吹く。囲炉裏では鉄瓶が静かに鳴っている。葱だけが入った味噌汁を取ったその時、縄を縛う手を止めて父がむこうを向いたまま言った。

「いつまで居るつもりだ。」

「明後日には帰ります。」

思わず私は少し居住まいを正していた。

「そうか。」

背中で答える父に、私はそれ以上声を掛けられなかった。空になった食膳をそのままに、沈黙は続いた。

暫くして兄夫婦が野良から帰ってきた。「親父。誰か来てるのかい。」土間の靴に気がついたらしく兄が玄関先から言ったが、親父は答えなかった。

「兄さん。お久しぶりです。」

「お、友次か。久しぶりだな。」

土間に出てきた私を見ると、上がり框に腰を掛けたまま、一服しながら日に焼けた笑顔で兄は嬉しそうに言った。

「十年ぶりか。随分と立派になったな、革の靴なんか履いて。」

「ええ。今は東京でなんとか三下の新聞記者をやってるんです。」

「そうか、ともかく息災で何よりだよ。」

兄は煙草を急いで喫み終え、欠けた灰皿で吸い殻を揉み消す。

「酒はもう飲めるんだろう。早速用意だな。」

忘れかけていた家の天井。変わらぬ虫の声。朦朧とする意識の中で、私は客間にいるのだと感じた。薄っぺらい布団のせいか久々の長旅のせいか、横になると体中が痛いのだが、そんなことはお構いなしだ。

そういえば、あの頃はいつも畳の上で寝ていたものだ。この時期だからまだ良いものの、今思えば、冬は本当に辛かったことを思い出す。

夜風だろうか、時々障子が鳴る。意識が、闇に落ちてゆく。

翌朝は雨だった。

津々と続く小粒の雨音に、ぼんやりと目が覚めた。九時は回っているのだろうが、空はどんよりと白く重い。

おもむろに身を起こし、厠へと立つ。母に聞くと父と兄夫婦はもう野良に出たらしい。私も身支度を調べると上着を羽織り、鞆からカメラを取り出し出発前の一通りの点検を済ませた。

「お袋。出かけてくるよ。」

もう一寸ゆっくりしていけという母の声を背に、靴に足を通した。

仕事を一通り終えたのは昼下がり。母に持たされた握り飯をつまみながら、夕刻まで町中を歩くことに決め、どこことなく彷徨っていた。

焦げ茶色の二階建て、あれは私の通った学校だ。何一つ昔と変わっていない。校庭の隅にある桜の成長と、顔も知らない教師の姿だけが時の流れを告げている。学校の隣の文具屋も、その隣のぼろ倉庫も、無邪気に走り回っていたあの頃のままだ。

ただひたすらに懐かしい、苦しみなど何もなかった、少年時代。

この角を曲がると駄菓子屋があった。二軒先には榎本ん家があって、その先は、そう、あの大きな蛇がいた畦道が続いてた。そんな道を私はゆっくりと、そしてあてもなく歩き続ける。

しかし段々と懐かしさよりも、人々の、そして風景のよそよそしさを感じるようになってきた。ここ十年で最も辛い年月から逃げた私は、もうここに居場所がないのかもしれない。そんな思いが強くなってきた。

半時も歩いたか。小字で上ノ瀬という所にたどり着いた。

篠竹と畑が疎らに見える中、不意に崩れかけた生け垣と、そして茅葺きの小屋が見えてきた。どうやら人の気配はしない。ただ、その荒れ果てた具合が、朧げな記憶に突き刺さってくる。

確かにここには一度、来たことがある。だが、思い出すことができない。

草むした玄関前にぼんやりと立ちつくしていた私は、不意に奥から声を掛けられた。

「どちらさんですかえ。」

人のいない筈の家からの声に一瞬何が起こったのか分からず、狼狽えながら視線を向けると、老婆が板の間に正座をしてこちらを不審気に見返している。痩せさらばえて曲がった背中に汚れた薄い着物、深い皺に落ち込んだ三白眼が一種妖の怪のような光を放っていた。

「どちらさんですかえ」

静かに、しかしうら悲しく迫るような声で老婆は繰り返した。私はもごもごと何か言おうとしたのだが、動悸は激しくなるばかり、背筋を走る得体の知れない恐怖に後ずさり、軽く一礼をするなり逃げ出した。まるであの老婆が追いかけてくるような気がして、思わず目を閉じて闇雲に走っていた。

一町ほど走ると、苦しさに自分が何故走っているのかを忘れかけ、立ち止まった。何度も深呼吸を繰り返しながら、この距離で息を切らした自分の情けなさを感じていた。そう云えば街に出るからというもの、これほどに走ったことはないな。毎日革の靴をすり減らし歩きっぱなしの生活とはいえ、確実に衰えているんだろうか、そう思い自嘲の笑いを浮かべた。と同時に再び首をもたげてきた好奇心から、もう一度あの荒ら屋の方を振り返ってみた。

相変わらずその方角からは人の気配はなく、それはまるで先ほどの恐怖感が嘘だったかのようであった。日はずいぶんと傾き、空気はもう冷たくなってきていた。

家に帰り暫くすると兄が戻り、そのまま夕餉となった。無口な父を囲むと自然に私たち兄弟だけの会話になる。小さい頃から変わらぬ食卓、暖かい家族の団欒そのままだった。

兄との会話が一段落し、私は父に声を掛けた。父は村のまとめ役を務めていたことがあり、あの小屋について知っているかもしれないと考えたのだ。

「父さん」

父はまるで何も聞こえていないかのようであったが、構わず話を続ける。

「今日午後、学校の廻りを歩いていたんです。そうしたら実は、半里程行ったところに荒ら屋を見つけて……」

その瞬間、父は何か気づいたかのように動きを止めた。

「あんな処に誰か住んでいましたっけ。」

暫しの沈黙の後、

「上ノ瀬の小屋か」

そうだ。

「あれは昔からの荒ら屋だ。誰も住んでなどおらん」

何事もなかったかのように父はまた、食事を始めた。

仕方がない、小屋のことは忘れよう。

私は再び兄との語らいに戻ることにした。

夕餉を終えると、名残を惜しむ兄と二人で呑むことにした。月の出る縁側に座り、煙草に火を点けると兄は、今日買ってきたという酒を開けてくれた。それを二つの湯飲みに満々に注いでもらおうと、兄と私、どちらからともなく口をつけた。

静かな秋の晩、月の美しさのせいか、旨い酒のせいか、はたまた久々の再会の味か、一升瓶は瞬く間に空になった。そしてお互い手持ちぶさたになり、酔いも深まってくるとなるともう、気づいたときには寒い縁側に二人寝転がっていた。

ぼそりと兄は私のことが気がかりだったとこぼした。

「十年前に突然出て行ったきり、全く連絡も寄越さずに。お前はお袋が一体何度泣いていたかわかるか。」

私は何も答えられなかった。そういえば出て行ったあの時、私はこの村には不要な存在なのだと思っていた。折しも寒い夏の年であり、廻りの人々は次々と飢えと病で死んだ。そんな中私は何もしてやれない。そうだ、私がいなくなればどれだけ家族は楽になるだろうか。私はそんなことを真剣に考えていた。

だが今は自分の育ったこの村に懐かしさを感じている。今思えば自分の思いこみで家族を捨て村

を捨てた、手前勝手な実に短絡的な行動だったのだ。

「本当なら一発や二発は殴ってやらねばならん位だが、お袋に免じて今日の処は押さえてやる。」

そう云うと兄は、こちらに向き直った。

「なあ、街には帰らずここで暮らせ。頼むからこれ以上心配を掛けないでくれ。お前がいなくなってから、」

「.....できません。」

そうだ。家族を捨て街に出たこの十年は、もう取り返すことは出来ない。この村に逃げ出した私の居場所は最早ないのだ。白髪交じりになった兄の横顔が、優しさが、かえって後悔してもしきれない、私が失ってしまったものを眼前に突きつけてくるのだ。

「そうか.....」

兄の顔はまるで昔の、私が別れを告げた時の父のそれであった。

その夜、私は夢を見た。あの荒ら屋の夢だ。

幼い私は何度もあの小屋に入ったことがあった。

餓鬼の遊びからはぐれ、道に迷った私は日も暮れかけた頃にあの小屋を見つけた。

中からはもの悲しい、しかし優しい歌声が聞こえてくる。ぼろぼろに泣きじゃくっていた私はその歌声に引きつけられるように戸を開けたのだ。

中にいたのは若い男であった。透けるような白い肌の、実に整った青年であった。ただ、腕には鎖が巻き付けられ、髪は伸び放題。真っ暗な小屋の中、僅かな月明かりに照らされたそれはこの世のものとは思えない光景であった。

「.....お客さんか」

青年から発せられたのは、か細くもしっかりと通る声だった。

「泣いているのか」

声を聞いて、段々と心が落ち着いてきた。さんざか泣きはらした後だったからか、私は不思議と怖さは感じなかった。

「お兄さんは、誰なの」

青年は顔を上げ優しい、けれど曇れた笑顔で私を見て言った。

「僕は、鬼だよ」

鬼という言葉にはあまりにも似つかないその姿に、私は思わず言葉を続けた。

「鬼さんは、悪いことをしたの」

「しようと思わなくても、悪いことをしてしまうんだ。みんなにとってね」

「どういうこと」

しかし青年はただ悲しい微笑みを浮かべるばかりで、何も答えない。こんなに優しそうな人が鬼な訳はない、私は子供心にそう感じた。

しかしその時ふっと、自分が迷子であった事を思い出した。気づくと夜はもう始まっていた。

「どうしよう。僕、うちに帰れないんだ」

「迷ったのか」

青年は少し考えると、言葉を続けた。

「そうだな。朝になるまでここにいるといい。明るくなれば人もいるだろう」

青年の心配そうな顔に、私は夜の闇の怖さを思い出し、答えた。

「……うん」

「よし。そうと決まれば、もう寝よう」

よろよろと立ち上がり、青年は鎖の下がる腕で自らの布団を引っ張り出そうとした。私はそれを手伝うとその中に入り込んだ。

暫くして青年も布団に入り、私は暖かさを感じながらじきに眠りに落ちた。

翌朝青年に見送られ小屋を発ち、少し藪を進んだところで道に出た。通りすがりの大人に道を聞くと、なんのことはない、学校までの一本道であった。

家に帰ると、父の拳固が私を待っていた。母は泣きはらしたようでその目は真っ赤であった。聞くと夜は集落の人たち皆で探し回っていたらしい。その日は結局青年の事は言えないままに、大人達に叱られる一日だった。

それから毎日、私はあの優しい鬼の所へと通った。放課後、日が暮れる前まで鬼と話をするのが楽しかった。今思えば他愛もない日常のお喋りだったが、兄とも、大人達とも違う、不思議な安らぎがそこにはあった。

一月ほど経った在る雨の日。いつもの様に小屋へ行くと、鬼の側に女の人がいた。私はその只ならぬ様子に小屋に入ることが出来ず、彼らの会話に耳を傾けていた。

「……ごめんなさい、修吾さん。母様はあなたを助けてあげられないの……ごめんなさい……」

女の方は鬼、修吾の母であった。赤の着物に黒い髪、澄んだ白い肌の美しい女性だった。だがただひたすらに謝り続けるその姿は、美しさがかえって悲壮なものに見えた。なんだか見てはいけないものを覗いてしまった様な気がして、私は独り小屋を後にした。

翌日、小屋へと行くと微笑みを浮かべる鬼の様子はいつもと変わらなかった。ただ、鬼の腕には鎖がなく、髪は短く刈られていた。驚き、呆然とする私に向かい鬼は挨拶代わりに話し始めた。

「見ていたのだろう。昨日来ていたのは、母様なんだ」

「……知ってる」

覗いていたことを咎められると思い、私は目を伏せた。だが、鬼は別段怒った風もなく続けた。

「僕がここにいるのはね、先読みの力があるからなんだ」

「さき…よみ…」

「そう。明日起こること、明後日起こること、十年後、二十年後までも見えてしまうんだ」

俄には信じられない内容に、私はただ立ちつくしていた。

「勿論、あの時君が来るのも知っていた。昨日のことも、今日のこともね」

鬼は、相変わらず淋しそうな笑顔であった。

それから、鬼は独り言のように話を始めた。

幼い頃、自分が力を持つことに気づいたこと。両親に打ち明けた時、その力は人助けに使うようにと言われたこと。そして何度も村の人々のために力を使い続けたこと。

そのうち、五年前の大飢饉に話が移った。

「初めは、彼らは寒い冬が来ると知って準備を始めたよ。でも、その年は彼らの想像が及ばない

ほどに酷い年だったんだ。多くの人が死んだよ。飢えで、そして病気でね」

青年は、ぼうっと遠くを見やった。

「それまでは警え見えたとしても、人の死は伝えないようにしていた。特にはっきりと見えたことは必ず起こってしまう。変えられないんだ」

そこまで話すと、ふと彼は私を見た。

「でもある時、つい話してしまったんだ。あまりにもくっきり見えてしまったから。すると暫くして、皆が噂を始めた。あいつが原因じゃないか、あいつは疫病神なんじゃないか、鬼なんじゃないかって」

微笑んだまま、また遠くを見る。

「ここに繋がれたのはその時からなんだ」

「でも、何故。修吾さんは悪くないんでしょう」

私の声は震えていた。

「皆怖かったんだろうね。僕のが、僕の持つ力が。仕方がないよ、あまりにも見えすぎるからね。でも、実はこうなることも分かってたんだ」

修吾さんには総て分かっていた。自分の持つ力はこういった結果を生むのかを。人々が自分を疫病神にすることを。しかし、だからこそ自分だけはその運命を恨まず、じっと耐えてきたのだと

。

そこまで話すと、修吾さんは暫く黙り込んだ。そして、意を決したように再び口を開いた。

「実は、今度兵隊に行くことになったんだ。昨日、母様が来ていたのはそのことを伝える為だったんだよ」

「.....えっ」

あまりの衝撃に、私は何も考えられなくなっていた。真っ白になって私は修吾さんに聞いた。

「じゃあ、もう会えないの」

「いや、君が待ってるから帰ってくるよ。僕には見えるんだ」

大粒の涙が溢れてくる。ぐしゃぐしゃになりながら私は答えた。

「うん。約束するよ。絶対待ってるからね」

私は大声を上げて泣いた。

数日後、修吾さんは汽車に乗り、街に行った。別れが苦しくて、私は見送ることができなかった

。

目覚めると穏やかな朝だった。

父に別れの挨拶をし仏壇に手を合わせ、家を発つと別れを惜しむ兄や母に私はいつまでも手を振り続けた。

帰りの汽車の中、私は心苦しきで一杯だった。修吾さんと交わした幼い時の約束を思い出すと同時に、中学の私は彼を裏切った、そのことを悔やんでいた。

だが修吾さんは、もしかしたら私が街へ逃げ出すことを知っていたのかもしれない。知りながら、笑顔でいてくれたのかもしれない。

会社に戻り戦記を調べると、修吾さんは送られた南方の戦地で死んだと分かった。死地へと向か

う彼の本当の気持ちは分からない。だが彼が最後に吐いた嘘は、私の心を少し救ってくれた気がした。

あの小屋にはもう修吾さんは戻らない。私ももうあの村には帰れない。

今唯思うのはあの老婆は一体誰であったのだろうかということだけである。